
非日常な俺たちの日常

雨谷和泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常な俺たちの日常

【Nコード】

N8036M

【作者名】

雨谷和泉

【あらすじ】

BL青春グラフィティ。

新藤龍矢は根っからのゲイであることを除けば普通の^{になったばかり}大学生。

そんな龍矢が恋をしたのは、大貫一哉という同級生だった。

一哉は明るく陽気な好青年。しかもどうやらノンケでもなさそう。うまく叶えば万々歳。

と、思いきや、そうは問屋が卸さなかった。

一哉の奇々怪々な言動に振り回される新藤龍矢（18）と、奇々怪々ワールドからの自立を賭けて突っ走る一哉。

普通で普通じゃないふたりの成長？物語。

現在は15禁以下の内容ですが、今後の展開として18禁の内容になりうることもあるため、ムーンライトノベルズに移動しました。
第三部からはそちらで継続していきます。

1 日常のなかの非日常な俺たちの馴れ初め

1 日常のなかの非日常な俺たちの馴れ初め

一哉を意識したのはいつのことだったろう。

いや、意識した、というのなら、大学に入学してすぐの頃だ。

ド田舎から上京してきて、初の一人暮らしをはじめて、上級生からのサークル勧誘の嵐に揉まれる日々に俺は目を回していた。

受講講義登録やら何やらのオリエンテーションを受けて大講義室から出てくると、もう揉みくちやになる。「何時から第五棟の新館のどこそこに集まっているから来て」だの、「ホールで演奏やつてるからちよつと聞きに来てみてよ」だの。

だが、自称石橋を叩いて渡る性格の俺は、それらの誘いには引つかからなかった。俺が引つかかったのは、初回授業を一通り出席した翌週の月曜のことだ。

「腹減ってない？ 学食の使い方教えてやるし、飯、奢るよ？」。

そう言ってそろりそろりと近付いてきた男子学生のアフロヘアを俺は忘れもしない。

「飯を奢る」の一言にそれまで固く閉ざしていたはずの俺の心がうつかりガードを緩めてしまったということは、その時、相当腹が減っていたんだと思う。

いや、そうだったんだと信じたい。

俺はそのままアフロ野郎の後について学食に行き、一杯260円のカレーうどんを奢ってもらった。

その時はべらぼうに美味いと思ったカレーうどんだったが、後日、俺は自分のハートを260円程度で売ってしまうような人間だったんだと自己嫌悪に陥った。

ともかく、そんなわけで、俺は入ってしまったのだ。

「戯曲研究会」というヤツに。

俺が元々戯曲を好きだったかつて？

そいつは愚問だ。

俺はそれまで戯曲というものをこれっぽっちも知らなかった。

高校の授業が何かでチラシと耳にしたことはあったような気がしないでもないが、俺の記憶としてはその程度だった。

それになんたって、例のアフロ野郎から唐突に「戯曲を知っているか」と問われて俺は、「ギキョクって、なんスか？」と首を傾げたのみに留まらず、「楽しい曲ってことですか」と紙に書かれた2文字の字面を見て答えたくらいだ。

だってそうだろ、「戯れる」って字と「曲」って字が入ってりや、楽しい曲としか思えない。

誰が演劇の脚本だのと思うか。

いや、知っているヤツは当然のように知っているんだろうけどな。ともかく、だから真実を聞かされたとき、俺はうつすらどころでなく失敗したなと思った。

俺の戯曲研究会に対する適性はゼロ。マイナスを切っているかもしれない。260円でつられた俺を呪いたいと思った。そして、アフロ野郎を呪おうと思った。

だいたい、アイツの軽い見た目につられた節もあるのだ。バンドが何かをやっているとしか思えないような紛らわしい恰好をするなつての。そのうえアイツは俺が入部するとほぼ同時にサークルを辞めやがった。辞めるようなところに俺を誘ったんだな、と、しばらくはアイツの姿を構内に探したくらいだ。

そんなこんなで俺は入部直後から「もう辞めたい」オーラを出しまくってたと思う。

研究のネタにするという本を買いに行くときもやる気無し。本の複写を取っているときもやる気無し。研究時間もやる気無し。ていうか、机に突っ伏して爆睡。

上級生が見るに見かねて、というか、いいかげん普通に腹が立つたんだろう。ある日の研究時間の後、ドリンクサーバーの珈琲を飲んでいた俺のところに来て、「無理に引き留めるつもりはないから」と言ってきた。

俺としては待つてましたと言わんばかりの台詞だったから、明日で辞めてやろうと思ったし、言った。このわけのわからんサークル活動を辞めれば、バイト先を探して、金稼いで、好きなことやって……と、明日からは輝く未来が始まりそうな気さえしていたのだ。

そんな明日への期待で、俺の心のガードはまた緩んでしまっていたのかもしれない。

退部手続きのやりかたを聞いて内心でガッツポーズを決めていた俺に、例の上級生が思い出したようにつけたした。

「あ、龍矢。今日、飲みあつから。今日ぐらい出るよ。歓迎会って考えたら居づらいかもしれないけど、ま、タダで飲めんだから飲んどけて」

俺のことを気安く龍矢とか呼んだ上級生は、名を安斎と言った。

無精髭を生やしたなかなかワイルドな面構えをしたヤツで、ちょっと見、四年生どころかそれ以上の年上に見えるが、三年だ。

安斎が言うとおり、明日には退部するヤツが歓迎会で飲むつてのもどうなんだろう、とは思ったが、俺はまたしても、「タダ」という言葉の誘惑に乗せられてしまった。

とにかくいつも腹を空かせていた俺は、ワカメきつねそばの唐揚げハンバーグ定食だのという学食メニューばかりでなく、他の物も食えるなら、とうっかり思ってしまったのだ。

だから、「ああ、じゃあ。行きます」なんて答えてしまった。

日もとつくに暮れた7時半。雑居ビルの階段を地下へと下りたところにある居酒屋へと安齋に連れられて顔を出すと、歓迎会は既に大盛況だった。

他の客たちの喧噪を掻き消すような奇声が店内の一角から上がっていて、その声にも顔ぶれにも覚えがある。新旧の顔が勢揃いだった。顧問の教授も同席していて、俺は席に着く前から早々にまた例の居づらさを感じ始めた。

誰かの「新人生ー！　ありがとうー！！　んじゃあ、ギケンの益々のー発展をー祈りましてーえ。4度目の乾杯をー」という音頭に、「おめえ、もういいよ！」という声が上がった。その声に被るようにたくさんさんの笑い声が弾ける。

あとになってから「止しておけば良かった」と思うのは俺の悪い癖で、往生際も悪いとわかつちやいるが、やっぱり出来ることなら回れ右をして帰りたい。「ちよつと実家から電話がかかってきたんで」とか「バイト先から今から来いって電話がかかってきたんで」とか、そんなあたりのデマカセをぶって、ズラかろうと思った、その時。

俺の目は見つけてしまった。

飲み屋の温かい色をした灯りの下で、奴は楽しそうに笑っていた。何がそんなに楽しいんだと問いたくなるくらいに、デカい口を開けて笑っていて、ぐい呑みを片手に「エイエイオー！」なんてアホらしく叫んでいる。

細い身体つきをしていた。

肩も細いが、腰のあたりも細くたよりなげに見える。

だが、隣の男の肩を抱いて大手を振って喚いている姿はまるでバネのように躍動的で、周囲の注目を浴び、満座の中で主役のように喝采を受けている。

そんなヤツの姿は、俺にはどこか遠いところにいる人間のように見えた。

これまでもうしこたま呑んだと見えて、暖色の灯りの下でもそれとわかるくらいに奴の目元には赤味がさしている。俺は「ダハハハ」などと笑っている奴の髪を、柔らかそうだな、と思った。

「龍矢、コイツもおまえと同じ新入生。一哉ってんだ。一哉、……ええと、何一哉だっけ？」

奴を俺に紹介しながら安斎が言った。

人を誰彼かまわず下の名前で呼ぶのはどうやら安斎の癖らしい。その代わりと言っていいのか、名字はなかなか覚えないと見える。

「大貫。大貫一哉、……でっす」

奴はまったくロレツが回っていない口調でそう言い、焦点の合っていない目で俺を見て、「俺、大貫。よろしく」

がつくと頭を垂れた。

「で、一哉。こいつは龍矢だ。ええと……あ、新藤な、新藤。新藤龍矢、だってよ。しっかし一哉よオ、こいつあデケエ男だよなア。

おめえ、んな酔っぱらって絡むとブン殴られッかもしれんぜ。……

んま、新入生同士、仲良く飲めや」

俺のことを「デケエ」と言うが他人のことはとやかく言えないはずの安斎が豪快に笑う。

そして俺たちの肩をバシンと叩き、俺を一哉の隣に座らせるとジヨッキを片手に自分の席へと戻っていった。

あっちこっちに散乱している座布団と潰れて寝っ転がる学生の身体を跨いで自分の席へと戻っていく安斎の後ろ姿を、なんとなく視界の隅で追った。

安斎は俺が明日には研究会を辞めるということを知っている。それでも俺に対する態度をまったく変えないあたり、俺は安斎に対して少し好感を抱きはじめていた。

「へえ。龍矢って言うんだ。タツヤ……。俺と、名前、似てんね」俺がカズヤであんたがタツヤ、と俺のグラスにビールを注ぎながら一哉は笑った。

舌っ足らずに「タツヤ」と俺の名を何度も呟く横顔を見る。たぶん、その眠たげな目つきからして何も考えていない。「タ」と「ツ」と「ヤ」という音を意味もなく繰り返しているだけで、頭では何も認識していないのだろうと思う。

俺がビールを呷る。すると「あんた、飲みっぷりいいね」と言っ
て一哉が注ぐ。それを空けるとまた次を注ぐ。俺が飲めば飲んだだけ一哉は注ぎ足してくる。

居心地最悪とか思っていたのも忘れて俺はだんだんと酔っぱらいはじめ、ビール瓶を5本ほど空けた頃には酔いの力というやつも手伝って、真っ向からまじまじと一哉の顔を見ていた。

もし素面だったら、いやきつと素面でなくても、そんな危険なことは日ごろ滅多にしない。

ビールの味は感じなかった。

酔いのせいでゆらぐ視界に、ほっそりした面立ちが映る。

鼻の先がほんの少しだけつんと上向いていて、眉の強さと相まってちよつと気の強そうな印象を受ける。灯りの透けている瞳孔がわずかに茶色がかっていて、それで肌の色も白いのだと納得した。

酒気に染まって存在を主張しがちな唇は間近で見ると思ったより薄い。

そんなことを思いながら見ていると、一哉が俺を見た。

ぐるん、という感じで身体ごとこちらを向く。

「どつたの？ さっきからぼーっとあっち見てるけど」

あっちじゃなくておまえを見ていたんだっての。

「あ、もしかして安斎さん？ あの人、恰好いいよねえー」

おまえ、何言ってるんだ。安斎はたしかに恰好いいが、俺はおまえを見ているんであって。てか、おまえ、安斎を恰好いいと思うのかよ。

いやいやそうじゃなくて、そもそも、だ。

安齋を恰好いいとか悪いとか思いながら見つめてる俺ってのでもいいのかよ！

そんな数々の内心のツツコミが行き場に困った挙げ句、一言、口から出てしまった。

「いやだから、そうじゃなくて俺は」

思わず口を滑らせてから、マズイと思った。

「そうじゃなく」て、どうだと言うんだ？

何を否定するつもりだ？

何を否定して何を答えるつもりだ。

「おまえを見ていた」と答えるのか？

「安齋は格好良くないと思う」とでも答えるのか。

それとも「男をじっくり見る趣味はない」？

「おまえは男を見て恰好いいと思うのか」？

それは俺が言えることじゃないのに。

むしろ俺が一番関心のあることなのに。

そして今一番知りたいことなのに。一哉、おまえに対して。

頭の中をぐるぐると回りだした考えは、急激に深刻さを増して、俺の心拍数を跳ね上げさせた。一瞬で酔いが冷める。

そして代わりに、ぶわっと変な汗が脇に滲み出してくる。

いや、コイツは今さんざん酔っている。

きつと、俺のたったの一言ぐらい、聞き流してくれるに違いない。という俺のワラをも縊るような願いも虚しく、一哉は俺の目を見つめたまま言った。

「そうじゃなくて？」

なんで泥酔しているくせに、こういうところだけはしっかり聞いているんだよ！

しかも、おそらく酔っぱらっているせいだろうが、目を据わらせて俺を見てくる。

おい、唇とがらせるんじゃない！

非常に、とっても、物凄く困った俺は、やぶれかぶれで苦肉の策に出ることにした。

一哉の前髪を一束つまみ、スツと梳く。

そしてその指を即、吹いた。吹いたふりをした。

「……ゴミ、ついてたんだよ」

一哉は俺の指を見てきよとし、それから「アハハ」と笑った。
「なあんだ。何かと思った。ありがと」

どつと肩から力が抜けた。

そして、安堵する間もなく、物凄い勢いで、皮膚の下を虫が這うような猛烈な恥ずかしさと自己嫌悪とが込み上げてくる。叫んで頭を掻きむしりたいのを、ぐつとこらえるのが苦しいくらいに。

なんだ、今のは。

俺は馬鹿か！？

まるで小学生並みの誤魔化しかたじゃねえか！
顔が熱い。

きつと、今、俺の顔はバカみたいに真っ赤になっているだろう。

もちろん、酒のせいではなく。

昼日中でなくて、皆が皆酒に酔っ払っていて、本当に良かったなあ、なんて思ってみても慰めにもならない。

俺、いったい何やってんだよ……！

お開きの後、駅へと向かう面々の最後尾から俺たちは歩いていた。
通りを吹き抜ける夜風が冷たくて、齒の根も合わない。
酒が回っているせいもあるのだろう。

おまけに頭痛も酷い。だがこちらは酒と自己嫌悪とのどちらに酔

ってそうなのかわからない。

ガタガタいつている奥歯と、ズキズキと疼いている頭痛も、てんで収まらない俺のハートのドギマギと呼応しているようにさえ思えてくる。

隣で千鳥足の手本みたいな歩き方をしている一哉はと見ると、彼は別段寒そうでもなかった。

むしろ心地良く泥酔している、という様子だ。ただし、泥酔。

駅のホームでよく見かける泥酔オヤジ並みに足許がおぼつかないシャッターの降りた店のショーウィンドーだの街灯の柱だのへと今にも激突していきそうな勢いで、傍目に見ていて冷や冷やさせられる。

だが、「線路は続くよどこまでも」を鼻歌に歌う一哉は、そんな俺の心の内も知らないようで、時折車道に出て行きそうになる。その時だけは、俺は彼の肩を掴んで引き戻した。

駅前の広場で解散になった。

三々五々、そのまま駅に吸い込まれていく学生も多かったが、繁華街に出戻ってもう一杯やりに行く連中もいる。男と女ふたりで駅の反対方向に消えていく後ろ姿も見た。

さてどうするか、と帰りの経路を考えていると、背中にトンと重みがあたった。

見ると、一哉が、俺の背中を枕に寝かかっていた。

ももごと口元を動かして、喋っているようにも見えたが、何と言っているのかは聞こえず、わからなかった。

「おい、大貫、大丈夫か」

肩を揺さぶると、寝惚けているらしい一哉が首を振る。

そしてまたもや、ももごと口元を動かした。

今度は聞こえた。

「一哉。」

「ん？」

「……俺、一哉」

「……は？」

「かず、や。…おれ」

「いや、だから、うん、一哉ってんだよな？」

覚えたとも。

一目惚れだからな。

酔っ払っていても覚えた。おまえの名前なら。

「大貫一哉、だったよな？ 大丈夫だって、覚えてるから」

てつきり『一哉と呼べ』とでも言っているのかと思って一瞬ドキリとしたが、きつと単に寝惚けているのだろう。うっかりとんでもない方向に走りかけた自分の思考を無理矢理引っ張り戻しながら、一哉の頬をぴたぴたと叩いてみる。

支えている手を離すと、ズルリと崩れてしまいそうなほど身体が揺れている。

「おい……大丈夫か……？」

自分の思考を冷静な方向に努めて引き戻してから、意を決して一哉の顔を覗き込んだ。

しつとりと汗ばんで目元を隠している前髪を掻き上げてやる。

「気分が悪いなら言えよ？」

一哉の薄めの唇は、予想したとおりと言えはいいのか、酒気に酔ってぼつてりと色づいていた。

そして、とろんとした一哉の目が俺を見ていた。

「なあ……。おれ……」

訴えるように見つめてくる眼差しが切なげに見えなくもない。

ような気がする。

ひよっとしてそんな風に見えてしまうのは俺に下心があるせいなのか？

うん、確実にそうだろうな。

と即思った理性が、至近距離で熱い息を吐いている一哉の、眠そうで、それでいて必死に見上げてくるような眼差しを見ている内に、アッサリ吹き飛んだ。

いや、だって、現にこんなふうに袖までつかまれているじゃないか。

それに見ろ、この俺を見てくる瞳の、言葉にならない言葉を訴えるような眼差しを。

一哉に掴まれている袖が、急に重くなった。

袖にいくつもの皺が入る。

俺の目にかかっているフィルターがそうさせているわけじゃない。きつとそうじゃない。

誰から見てもどう見ても、告白、もしくは準告白の瞬間が今まさに訪れようとしているはずだ。

が、その前に俺の心拍数急上昇な心臓が保たなさそうだ。どうしてくれる。

また変な汗が出て来たじゃないか。

「なんだ？ 腹でも減ったのか」

敢えて気がつかないふりを装ってみた自分の台詞の白々しさに、いつそ赤面したくなった。

おそらく今の俺の顔には、ドギマギ具合がモロに出てしまっているだろうが、一哉は酔っているから気付いていない。……といいな。祈るような気持ちでそんなことを考えていると、あおのいて俺を見ている一哉の喉仏が動いたのが見えた。

「……俺、一哉……が、好きだ」

なに？

なんだって？

『好きだ』。

と聞こえた。

好きだ、だって？

聞き間違いじゃない……。

今、たしかに聞こえた。

『好きだ』。

やった！！

すげえ！ 俺と一哉が、お互いに一目惚れだったとかつて！

俺の、不安と期待ではち切れそうになっていったハートが、快哉を叫んで破裂した。

こんな幸運ってあるか！？

いや、あってもいいかもしれないが、俺にとっては、一生の間にも滅多にないような幸運だ。

感動の台詞を速攻フルで脳内内リフレインしようとして、ふと俺の思考が止まった。

いや待て。

待て待て。

今、たしか「一哉が好きだ」と一哉は言った。

一哉が、だ。

「龍矢が好きだ」ではなかった。

一哉って誰だ？

一哉は一哉、今日の前にいる一哉自身じゃないか。
好きだ、と言ったおまえ自身のことじゃないか。

どういうことだ？

単に言い間違えただけなのか？

それとも一哉は実はとんでもないナルシストだったのか？
いやいや、そうだ、言い間違えたただけだ。きっと舌が回らなくて
それか俺が聞き取りそこねただけだ。俺の極めて悲観的な思考がそ
うさせたに違いない。

と、なんとか希望の欠片を見出した俺の心を踏みにじるように、

「……俺、一哉が好き」

俺の胸に頭を押しつけたまま、一哉がまたもつぶやいた。

言い間違いでもなさそうだし、今度ばかりは聞き間違いでもない。
聞き間違いじゃ、なかった。

その考えは、突如として崩れて来た岩の塊のように俺の心を潰し、
地面にめり込ませた。

一哉は、いったい何という巡り合わせか、俺と同じ嗜好の持ち主

だった。

けれど、既に「一哉」とかいう名の想い人がいた。
というより、自分に恋しているヤツだったらしい。
いったいなんだ。

まるで天と地の間を音速ジェットコースターで行き来しているよ
うな気分だ。

俺の頭の中で何かが真っ白に蒸発していった。

2・それから

『俺、一哉が好きだ』

あれからというものの、俺の頭の中では四六時中一哉のあの言葉がぐるぐると回り続けている。

お陰で、毎日がさんざんだ。

シャンプーで身体を洗うわ、髭剃りで眉を剃るわ、箸でカレーを食おうとするわ、何も手につかない。

考えても考えても謎が深まるだけのあの言葉。大学の講義なんか当たり前のように一言も耳に入らなかった。

一哉が一哉を好きだって？

いや、「俺、一哉」と「が好き」の間に実は「龍矢のこと」という文句が抜けていたんだが酔っ払っていたのですっかり言い忘れたとか。

いやいや、ひょっとして、一哉は本当はなかなか高尚な奴で、自分を愛さないとダメだみたいなことを俺に間接的に伝えたかったとか。

……うん、いくらなんでも無理矢理過ぎるよな。

だいたい、あの恍惚とした言い方は間違いなく恋をしている奴の口ぶりだった。

「現代に生まれ落ちたナルキッソス」とか、てんで俺らしくもない文句が頭に浮かぶくらいには、俺は参っている。

「……なあ、一哉って、ちょっと変わった奴だったりする？」

そんな俺の唐突な呟きに、隣で映画雑誌を捲っていた安斎が「はあ？」とこつちを見た。部室には煙草の煙が充満していて白く煙っている。

机の上には誰かが買ってきたらしいポテチとコーヒーの缶が散乱

しているが、誰も片付ける気配がない。

「なにをいきなり。一哉が変わってるかって言われてもなあ。そんなに付き合いが長いわけじゃねえからわからん」

安斎が言うのはもつともだ。俺もそうだが一哉だってついこの春に入部したばかりだ。そんな深いところまでわかるわけがない。だが、俺としては、誰かに「一哉は物凄く変わってる奴だ」という太鼓判を押してもらいたかった。

一哉は他人からしてみれば自分が好きだと聞こえるような言葉を言うくらいに変な奴だ、と。

俺にとっては理解不能だった一哉のあの言葉の裏をどう読むかで、俺は夜も眠れないほどだ。

いい加減に考えるのをやめたいと思っているのに、ほんの少しでも時間が出来るといつの間にか考えてしまっている。何をやっていても最後にはそのことを考えてしまっている俺がいる。恋の病は深い。

結局、一哉が俺の理解も追いつかないほどの変人だと俺が思っていたわけは、自分が一哉に振られたというのをあんまり認めたくないから、というのが本当のところなんだろうと思う。

そう、うつすらわかつてはいるんだ。

「……何かあったのか。一哉と」

安斎が俺を見ていた。

さすが安斎大センセイ。鋭くていらっしゃる。

「いや、何かって……か」

俺はゲイなんで一哉に一目惚れしちまったんですが、一哉もゲイっぽかったんで、これぞ運命すわコクるぜ！と思ったら、一哉は「一哉を好き」と言いました。

なんて言えるか。阿呆。

「その……」

俺が言葉を濁していると、安斎は溜息をついた。

「なんだ、何かモメたのか」

まあ、モメたつていやあ…モメたのかも。ただし、俺の心の中で一方的に。

「ああ…。なんだ。その口ぶりからすると、言いにくいことなんだな。まあ、とやかく言わんが、新部員同士仲良くやってくれよ。部の存続に関わるからな」

いや、そこで言いにくいことと断じられると、今のこの空気がちよつと気まずいつていうか、たしかに言いにくいことではあるんだけども。

「……あ、はあ…まあ。……すみません」

しかし、安斎はつくづく大局から物を見ている男だなあ…「部の存続」という大局から。

……てことは、戯曲研究会が続くんなら俺なんてどーでもいいんだろうか。

「ああ、龍矢。そういえば」

「……はい？」

煙草の煙を吐きながら時計を指さして安斎が言った。

「一哉と新部員でので思い出したんだが、今日、一哉が知り合いを連れてくるらしい。ウチに入会希望だそうだ。四限が終わったら顔を出すと言っていたから、来たらちよつと説明してやってくれるか」
「は……。は!？」

一哉の、知り合い、だと!？ しかも、見学もしていないのに入会希望だと!？ で、四限終わるのつて、あと20分ぐらいしかないじゃないか。

渋い髭の下で唇が動いた。

「まあ、一哉もいるから大丈夫だろうが、部員は逃したくない。…喧嘩中に酷なこと言つて悪いが、私情は挟むなよ」

「はあっ!？」

大局を見過ぎる男安斎を、今ばかりは呪いたい気持ちでいっぱいだ。

折りたたみ机の上の安物の目覚まし時計を睨み付ける。
だいたい、どんな顔をして一哉に会えというんだ。

あの後、俺は一哉の顔を見られなかった。

告白ってヤツは、裸になることだと思う。

心を裸にして、相手の前で晒すことだと思う。少なくとも、俺は
そう思う。

初恋は中学の時だった。

体育大会の応援団で団長をしていたヤツに、俺は惚れた。

白手袋に長い学ラン。長いハチマキを風に靡かせて、腹の底から
の大音声をグラウンドに響き渡らせていたアイツを前に、俺は裸に
なれなかった。

心の底から懂れて、心の底から好きだった。

当時の俺には、人を愛するってことがどういことかまだわから
なかったし、知らなかったけれど、恋い焦がれる想いだけは本物だ
った。

アイツの前で裸になりたい。

俺はおまえが好きなんだ、と叫びたい。

抱きつきたい。

日に焼けた熱い肌を触りたい。抱き締めたい。

シャツが似合うあの背中に自分の身体を隙間無く密着させて、顎
を掴んで、唇を押しつけて、その吐息を吸い込みたい。

間近で声を聴きたい。

声を上げさせたい。

汗ばんだ身体に潜り込んで、一つになって、俺の昼も夜も冷める
ことのない狂おしい熱を、想いを、思い切り叩きつけたい。

……でも、諦めた。

3年の終わり、卒業式を前にして、俺は告白しようと思った。

告白しても、俺は100%振られるだろうし、第一、告白したこ
とが他のヤツらに知られたら、何と言われるかわからない。気味悪
がられるだろう。学校に行けなくなるような騒ぎになるかもしれな

い。いや、俺はいい。気味悪がられても仕方ない。ずっと、俺の性癖がバレることに神経質になって、四六時中ビクビクして来たけれど、最悪の事態になった時の覚悟なら、今は出来ている。アイツへの想いは本物だから。嘘偽りなく、アイツのことが一等好きで、それは自分に対して誇れることだから。

自分に誇れる想いの前に立ちはだかる敵なんて、俺にとっては敵じゃない。

万もの非難を浴びたとしても、俺は堂々と振る舞おう。

決死の戦いに赴く、主君に絶対の忠誠を誓った戦士のような気持ちだった。

でも。

でも、俺が告白することで、アイツまでが心無いことを言われるかもしれない可能性を考えたら、俺の心は途端に臆病になった。

いくら卒業式の告白だといっても、その後、全員が全員まったく別の学区にいくわけじゃない。

高校に入った後も、もしかしたら、アイツが密かに噂されるかもしれない。

「新藤龍矢ってホモに好きだって、言われたんだとよ」

「もう、とつくにケツ掘られてたりして？」

俺の大切な人が、そんな下卑た噂話の種にされる。

そう考えると恐ろしかった。

吐き気がした。

そんなことになるくらいなら。

——俺のこの想いは沈めよう。

こうして、俺の初恋は終わった。

アイツは卒業するまで、そして卒業してからも、俺のことを何となく近くにいたただの友だち、ぐらいに認識していただろう。

俺は学んだ。

学校での恋は不毛だと。

今やネットなんていう便利なものがある。

同じ仲間が集まるところを探して、同じ嗜好の持ち主とツルんで、
燻った慾と熱を晴らす。

相性が合えば付き合う。

合わなければその場限りでサヨウナラ。

それが、誰も傷つかずに済む……少なくとも、世間の不条理に傷
つくことはない安全な方法なのだと学んだ。

それからというもの、俺は長い間、本当に長い間、学校での恋を
自分に禁じてきた。

俺は、日頃のたいていのことにおいては先走ったり、やらなくて
もいいことをやって後悔したりすることが多々だが——一言でいう
なら軽率さに自信があるってことだが、こと恋愛に関しては極めて
慎重だった。あの初恋の苦い思い出を、ずっと引き摺っていたから。
だから、一哉に対する一目惚れは、俺にとって驚くべきことだっ
た。言い方を変えれば、否が応もないほどの衝動に理性が押し流さ
れた結果が、この恋なのだとも思う。

そして、まさか越えられるはずもないと思っていた、ノーマルと
ゲイの壁を、一哉は一瞬で越えてくれて——いや、実際のところは、
元々こちら側の人間だった、ということなのだろうが、ともかく俺
は狂喜した。

だが、その後はいったいなんだったのだろう。

今もって、自分の恋がどのあたりに向かっているのか、わからな
い始末だ。

ただ、俺は忘れられない。

俺に縋り付いてきた一哉の顔。そして、あの時に味わった俺の鼓
動の激しさ。

俺の丸裸になった心を見透かされたような、あの瞬間。

あの一瞬、俺と一哉は繋がった、と思った。

腕に重みを抱きながら、丸裸の俺の心と、丸裸の一哉の心が、触れて溶け合う言い知れない快感に、脳髓が焼き切れそうだった。

なのに、敢えなく俺の想いは「一哉」の前に脆くも砕けた。

俺の心は丸裸のまま、放り出されてしまった。

そして今も宙ぶらりんのままだ。

あの子の帰り道、俺は一哉の顔を見なかった。と思う。

一哉が何か言っていた気もするが、何を言っていたのか覚えていない。

俺はきつと上の空だった。

目覚まし時計の中で時を刻む秒針の音は、俺に判決が下るまでのカウントダウンのようだ。

16時8分。4限が終わるまで、あと2分。

気の早いセンサーなら、もうそろそろ終わりにしている頃だ。

一哉は何の授業を取っているのだろう。一般教養なら、自然科学か、社会心理学。他に何があったつけ。

俺はまだよく知りもしない教授らの顔を思い浮かべては、授業が早く終わるだろうか、遅く終わるだろうかと考えて、そうこうしているうちに、時計の針が、カチリと動いた。16時、10分。

心臓が、ドキン、と一際高く鼓動を打った。

一般教養の教室がある棟からここまで来るのには5分もかからないだろう。一哉は入部希望の新生とやらと連れて、廊下を走ってくるのだろうか。あの明るい笑顔を振りまいて。

そして、俺を見るなり、顔を背けたりするだろうか。

あの夜、酔っ払ったまま何か言っていた一哉を、俺は突き飛ばした。

俺の秘密を、一哉と共有できたと思った気持ちを、裏切られたように、辛くて。

無性に悲しくて、目の前が暗くなった。

まだ、両手には、あの時の感触が残っている。俺がそうではないかと見たとおりに、細い肩をしていた。

たたらを踏んだ一哉を俺は氣遣うこともなく、真っ直ぐ駅に向かい、電車に乗って帰った。

下手をしたら車道に出て行きかねなかったほど酔っていた彼を突き飛ばして、何も言わずに放り出して。

だが、どうだ？

そもそも、俺は一哉が取っている授業も知らない。

どこに住んでいて、というのは酒を飲んでいる間にチラと聞いたが、それ以外、一哉のことで知っていることなんかほとんどない。

それなのに、俺は一哉に裏切られたと思った。何も知らないくせに。

そう考えると、笑えてきた。

一人相撲も一人相撲。そして、ハタ迷惑で身勝手極まりない、烏滸がましい話だ。

俺はいつたい一哉の何のつもりで、苦しい思いをしているのだと思うていたのだろう。

いつたい一哉の何になったつもりで。

だから、部室のドアがけたたましい音を立てて開いた時、俺の心臓は握りつぶされたかと思った。

「あつ！ 安斎さぁん！！ おつかれっス！ もうね、俺のナンパ大成功！！ 新入部員つれてきたよー！」

安斎の煙草で白く煙っていた部室に、それを蹴散らすような明るい声が飛び込んで来た。

俺が予想した通りに、陽気さを振りまいて駆け込んできた一哉に、俺は少しだけ安心し、そしてすぐさま、不安になった。一哉がいるドア際と、窓辺近くにいる俺。この距離は埋められるだろうか。

と、再び暗い気持ちに陥りかけたところで、ちよつと待て、と思った。

ナンパなのかよ。

恐る恐る、だが、そのくせ食いつく勢いで、俺の目は一哉を追う。追ってしまっていた。

ロンドンに破れたジーンズ。

なんてことはないスタイルだが、一哉、今日も似合ってる。

そんな一哉の隣でオロオロしているのは、コットンシャツをダラリと外に出して、のっぺらとした色合いのジーンズを履いた青年だ。黒縁の眼鏡を掛けた、俺と同じく田舎から出てきたんじゃないかと思われる、いかにも平凡そうなヤツ。

「キハラマサトってーの。俺とクラスがいつしよのヤツなんだけど、変わったヤツでさあ。ハムレットとかマクベスとか古典のが好きなんだって。勉強したいって。たしか安斎さんも好きでしょ？ シェイクスピア」

キハラ、マサト……。

一哉が「ナンパした」というキハラマサトを俺はあわや睨み付けかけていたかもしれない。

「おお。マサト？ マサトか。よく来たなあ。まあ、座れや。俺も好きだが、シェイクスピアが好きなんだって？ 今日日の学生でしつかりシェイクスピア読んでるヤツってそうはいねえぞ。まあ、何か食え。ほら、そこらへんにあるヤツ、何食ってもいいからよ」
机の上にパーティー開きをしたままのポテチ袋群を顎でしゃくった。だが、きつとソイツは湿気ってる。

「一緒にパンキョー受けてきたんだけど、授業中ずっとギケンの話で盛り上がっちゃって。ま、あとは俺の色気にグラッってヤツかな。あ、俺も食っていい？」

キハラが肩を驚かせ目を白黒させたのを目撃してしまった俺も噴き出しそうになった。「俺の色気」って、何言ってるんだ、一哉！

だが、かなり内気そうに見えたキハラは、意外にもポテチ袋の前に陣取って、遠慮無くバリバリと食い始めている。腹を空かせているのは皆同じなのかもしれない。

安斎はまさに流れるような手つきで入部届をキハラに渡し、

「そうかあ。一哉と意気投合したのか。いや、コイツはいいヤツだよ。面倒見もいい。定例研究会は毎週金曜だが、金曜以外にもこんな感じで部屋で皆ゴロゴロしてる。ゴロゴロしながら本を読むのも研究のうちってヤツだ。バイトなんかで都合がつかねえ時は誰かに言ってくれりゃいい。そんなわけで、ま、よろしくな」

流れるようにボールペンを持たせ、流れるように拇印を押させて、神経質そうな小さな字で「木原正人」と書かれた記入済み入部届をファイリングした。

見るからに純朴で気の弱そうな木原君は、何か物言いたげに口をもごもごとさせて、

「……あの、俺、べ、別に大貫くんの色気でナンパされたわけじゃ

……」

サラッと流しておけばいいことを言い出しやがる。

安斎がファイルをしまいながら笑った。

「誰もそんなこと思っちゃいねえよ」

という言葉が終わるか終わらないうちに、一哉が言った。

「あ、木原くん、俺の言ったことに気にしちゃった？　ごめんねえ？　俺、ゲイだからさー。ついつい、男見たら色気とかエロとかケツとかアソコとか考えちゃってさー」

今度ばかりは、心臓が飛び出た、と思った。比喻ではなく。

一哉！　おまえ、何てこといってやがるんだ！　そんなカミングアウトしたら、木原が速攻逃げるだろう！　でなくて、おまえ、いいのかよ、こんなところでカミングアウトしても！！

俺がカミングアウトしたわけじゃないのに、俺の方が晒し者になった気分だ。座り込みみたい。

あはははは、などと笑っている一哉の顔がぐらぐらと揺れて見えるのは、気分の悪くなった俺が目眩を起こしているからだ、と、少ししてから気付いた。

「げ、ゲイ！？　それって、ほ、ホモってこと……だよね……」

木原くんの声が裏返っている。

「あれ？ そんな珍しい？ 俺、男子校だったからさ。わりといるよ？ ねえ？ 安斎さん」

なんでそこで安斎の名前が出るのだろうと思ったら。

「ああ……。まあ、俺も男子校だったからなあ。いたこたいた、な」
「ほら！ そんなもんだよ、木原くん」

一哉の声には一点の曇りもない。

「俺のいたクラスなんてさー、42人中24人がホモだったよ？

半数以上。ま、そのうちの大半は俺がホモにしたみたいなものだけどー」

「え、ええっ！？ かつ…一哉くんが！？」

ますます挙動が怪しくなってる木原よ、おまえ、今なに考えてやがる？

「ああ、うん。俺。ほら？ ぶっちゃけやりたくてしょうがねえじやん。俺の学校ってちよつとした山の中にあつたからさ。街まででないと女子校のヤツらとか、共学のヤツらに会えないの。それで全寮制だよ？ もーみんないつつもムラムラを持て余しててさ。元々俺のクラスにつて、5人ぐらいソノ気のあるヤツがいて、あ、みんな俺のダチね？ で、いろいろとやってたら、ソノ気あつたヤツらのノンケのダチ一人二人がソツチ系に流れだしてさ。そしたら、どんどん広まっちゃつて。異端つて数が増えると異端じゃなくなるんだよねー。初めは気味悪がつてた周りのヤツらも、『ま、いいんじやねえ？』つて感じになつてさ。結果的に、過半数がホモになつちやつた。仮性ホモだけど」

俺は頭痛がしてきた。どんな学校だ。

「いやあー。いい思い出だよー？ みんないい友だちになったもん」
美しい思い出に浸っているのか、窓の外を仰いで「はあ……」と溜息をついている一哉が、俺にはわからない。

「あ、いつとくけど、今でも友だちだから。24人のうち、半分ぐらいは高校出てから更正したみたいだけど、今もよく遊んでるよ」

くるりと振り向いた一哉が念を押すように言う。

残り約12人のうち、元からソノ気があつた5人を引いても、約7人は更正できなかったんだな、なんて、妙に冷静に計算した俺がいた。

つい先刻までは、一哉にナンパされたという木原に嫉妬の炎を燃え上がらせかけていた。

今はもう、その気力はない。

木原も俺も脱力しきって何も言えなくなった頃合いを見計らったように、

「ま、そんなこつて、万々歳だな。んなら、あとは一年同士で仲良く歓談つてことで。俺はバイトあつからこれで帰るが。あとは大丈夫だよな？ 部室の鍵は、最後にここを出るヤツが受付に返してくれ。学籍番号と名前とサークル名を書くところがあるんだが、それは直に聞けばわかる」

そう言つて戸締まり確認するように部室を見回した安斎が、俺を見た。

「そうだ、正人。コイツも一年だ。龍矢つて……あー…なに龍矢だっけか。また忘れたな。あ、そうそう、新藤龍矢。この通りデケエ身体してるが、悪いヤツじゃねえ。ま、仲良くな。じゃあ」

そして安斎は、机の上に放り出していた財布を尻のポケットに収めると、部室を出て行つた。出て行く直前に、俺を振り返り、「龍矢、頼むぞ」という一言を残して。

一哉は「いいヤツ」で俺は「悪いヤツじゃねえ」なのか、と一瞬思ったが、それ以上に「頼むぞ」という安斎の声が胸に残つた。

俺は5日前、ギケン、つまり戯曲研究会を辞めるはずだった。退部届を明日には出すと決意したその夜に、一哉と出会つた。

一哉と出会つて、一哉に惚れて、一哉の秘密を少しだけ知つた……気がして、ひよつとしたら振られたのかもしれないが、退部してやる、という気持ちは消えていた。

たぶん、一縷の望みに縋ろうとしているのだと思う。俺は。

安斎は、翌日、退部届を出さなかった俺に何も言わなかった。

当たり前のように、俺の顔を見て、俺を図書館に走らせて、俺にコピーを取らせた。

「頼むぞ」という今の言葉も、俺の居場所はここギケンなのだって言っているように俺には聞こえて、宙ぶらりんのまま心許なく漂っていた俺の心の一部が、少しでも地面についた気がした。

そう、宙ぶらりんな俺の心。

ほんの一部は地に足を着けたのかもしれないが、大部分はまだ浮いたままだ。

なんたって、俺の惚れた一哉は、自分が好きだとか言うような変なヤツで、さらには、「じゃあ俺の初恋の苦い思い出はなんだったんだ！」と胸元に掴みかかりたくなるくらいにあっさりと公衆の面前でゲイであることをカミングアウトしてしまうようなヤツで、そのうえノンケをゲイにしようようなヤツで！

そんな一哉への「好きだ！」という気持ちだが、今、俺の心の大半を占めている。

そのせいの宙ぶらりん。

ああ。つくづく思うが、俺はなんてヤツを好きになってしまったのだろう。

2・それから（後書き）

現在は15禁以下の内容ですが、今後の展開として18禁の内容になりうることもあるため、第3部からはムーンライトノベルズにて継続します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8036m/>

非日常的な俺たちの日常

2010年10月8日13時55分発行